[別紙２]

審査の結果の要旨

氏　名　Christine Angela Phillips

本研究の目的は痴呆患者の行動障害に対して、リビングリハビリテーションの有効性を明らかにすることを目的とした活動プログラムを考案し、プログラムに参加した痴呆性老人の比較分析を行い、現在保養施設で行われている活動をもとに新たな活動プログラムを考案することにある。

１．質的民俗学的手法を用いた。データ収集期間は15ヶ月間で、病院入院患者（病院群）と養護施設の痴呆性老人（養護施設群）を対象としたが、分析過程を補足するため幼稚園児も対象に含めて観察と分析を行った。

　データ収集は参加者の観察および非介入的観察法を用い、反応や出来事を記述した。またリビングリハビリテーションに対する意見や施設の規則、リハビリテーションのやり方を聴取するために、情報提供者に対するインタビューを行った。

２．記録をもとにデータ分析を行うとともに、写真やビデオテープなどの視聴覚器材を用いて参加者の反応を記録した。プログラムは１週間に２回の頻度で６ヶ月間、病院の作業療法士と養護施設のレクリエーション専門家とともに観察を行った。データ分析はWolcott（１９９４）とSpradley（１９８０）の方法組み合わせた民俗学的手法に従った。

３．病院群および養護施設群間でリビングリハビリテーションプログラムに対する反応の相違が認められた。類似点と相違点は病院群および擁護施設群の各々に影響を及ぼす因子によって異なっていた。病院群では擁護施設群よりも不満や不寛容を示し、否定的な反応が多かった。それに対して、養護施設群は肯定的反応を示し、プログラムに対する協調姿勢を認められた。また、両群とも参加者の反応は様々な因子の影響を受けたが、参加期間、教育ﾚﾍﾞﾙや習慣などの背景因子、状況設定、まとめ役の介助などが共通の因子として認められた。

４．病院群では擁護施設群に比べて、リビングリハビリテーションを受容しない姿勢が顕著で、不満の程度が高く、治療者または介護者の介助なしにプログラムを継続することが困難であった。

　また、痴呆性老人の行動と同じ文化的背景の小児の行動に類似点を認めた。

５．リビングリハビリテーションの目的は機能を回復することではなく、本人が望まない行動を抑止することでもない。むしろ参加者が議論やプログラムに積極的に参加しようとする意思に注目する。参加者は肯定的にも否定的にもプログラムに参加することができ、リビングリハビリテーションはこれらの意思をサポートするが、受動的な参加者に対しては拮抗的に働くことが明らかとなった。また、本研究により、様々な薬物療法を受けた患者に対しては、いかなる長期の非薬物的治療も効果が低いことが示唆された。痴呆患者の多くが脳血管疾患や高血圧などの慢性疾患に罹患しており、痴呆の治療に加えて他疾患の治療を受けているからと考えられた。従って、リビングリハビリテーションが有効に機能するためには、薬物治療を受けていないことが望ましいといえる。

以上、本論文は痴呆に対しては未だ有効な治療法は確立されていないが、適切な非薬物治療及び管理によりかなり改善されうることを示唆しており、本研究は日本の痴呆性老人に対する介入プログラムを立案する際に、リビングリハビリテーションが有用である可能性を明らかにすることが出来たと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。